

北欧ピアノトリオの真骨頂が味わえる美しい旋律と精緻なインタープレイベーシスト、イエスパー・ボディルセンらデンマークを代表する3人が、音の響きにこだわり抜いたスタンダード2作品を世界同時初CD化

知らないミュージシャンの演奏をはじめて聴くときは、わくわくする。情報がほとんどなくて先入観が全くない場合はなおさらだ。北欧のピアノトリオの作品、と言って送られてきた音源を、仕事が終わった夜更け、1曲目の〈Blame It On My Youth〉の再生ボタンを押して、えっ、と思った。私は子どものころカトリック系の修道院が母体になっている女子校に通っていたが、構内にある礼拝堂にいて午後の日差しがステンドグラス越しに流れ込んできて壁に鮮やかな色彩の模様を様々に描いては消えていくのだが、演奏を聴いているとそうしたステンドグラスの作る一瞬の絵画が目に浮かぶのだ。

そして改めて収録されているナンバーを眺めるとスタンダードを中心にオリジナル作品が『Moods』に1曲、『Moods, Vol.2』に3曲。ただスタンダード曲の中に〈Moon River〉や〈Tennessee Waltz〉が収録させているのが疑問に感じた。この2曲は今バップ系のジャズ・ミュージシャンはライブでまず演奏しない。演奏するとしたら歌伴くらいだろう。インストでは「こういう曲は料理のしようがないよね」ということになる。このピアノトリオはどんなふうに演奏するのか、これも興味深かった。そんな中でひとつ気がついたことがある。

ジャズの演奏で、特に楽器の場合はリズムと旋律に大きく焦点が当てられるのは言うまでもない。しかしヘンリック・グンデら3人はリズムと旋律に加え音質を重視していると感じた。ピアノの音の素晴らしい透明感、ベースのイエスパー・ボディルセンの空間的な拡がりのある音質、そしてドラムは、これはドラムの音なんだろうかというほどの美しい音質なのだ。このトリオの特徴は、ピアノ、ベース、ドラムそれぞれは個性が際立つ音質なのだが、一瞬見事に溶け合うように聴こえることだろう。ヴォーカリストは

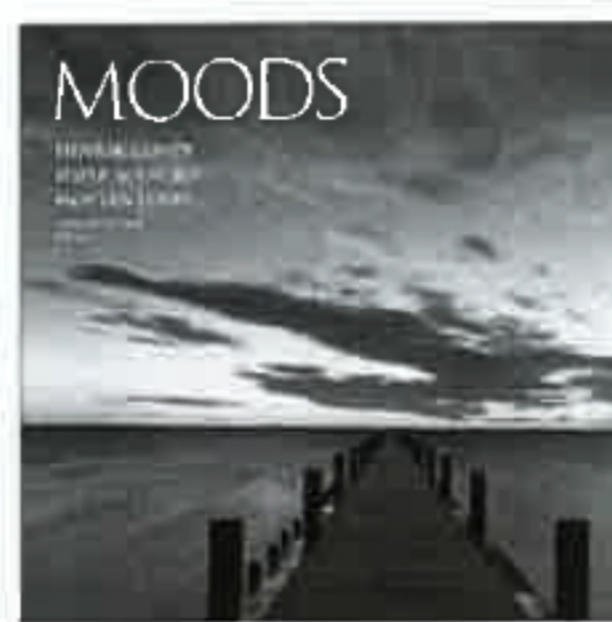
音質を重視するが、インストのミュージシャンは音質については二の次になるものだ。しかし、彼らは音質も徹底して重視しているように感じられる。そして聴くものにとって音質は大事な要素で、特にドラムはリズム重視で気持ちいい音質のドラムは非常に少ないと感じているので(私の個人的感想)モーテン・ルンドの存在感は大きい。

2つのアルバムを通して私が感じるのは、ミュージシャンたちの無垢な精神だ。演奏にテクニックを誇るような「押しつけがましさ」はなく圧迫感がない。にもかかわらず〈Bye Bye Blackbird〉や〈Softly as in a Morning Sunrise〉〈Fever〉の程よい自然な躍動感とスリル。繊細だけではなく時には非常に力強いにもかかわらず無理がない。

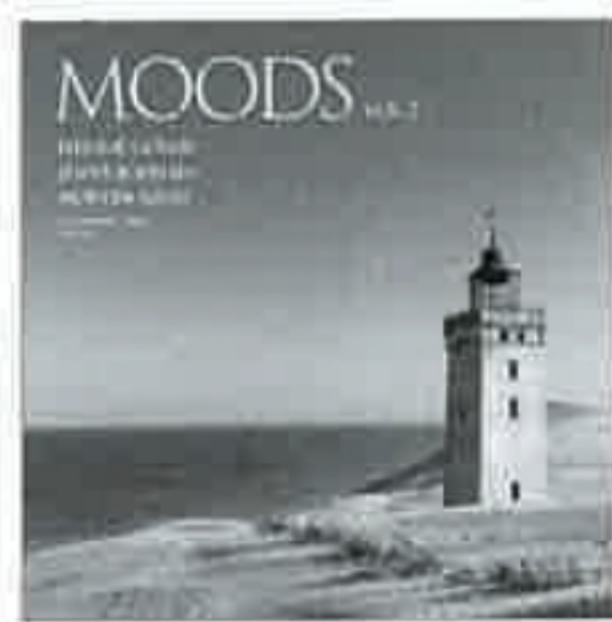
そう、すべてが自然なのだ。演奏で広がる心地よい空間に招待してもらいステンドグラスから差し込む光の動きを無心で追いかけてながら過ごす、そんな作品だ。気がついたら3時間ほどこの世界に浸っていた。

私が特に好きなのはグンデ作曲の〈Fanølyng〉と〈From E's Point of View〉だ。

ああ、いいなあ、このトリオで歌いたい、と思った。



『Moods』(寺島レコード)



『Moods, Vol.2』(寺島レコード)

本作収録
〈Moon River〉の
収録シーンを
見る



レコーディングスタジオにて。左からヘンリック・グンデ(a)とイエスパー・ボディルセン(b)
©Johanne Hjerrild Damkier Bodilsen